リレーエッセイ

ハードルを越えて 23

松下（まつした）　佳生（よしき）さん
（霧島市）

全力で走ったときに感じる風が、こんなに気持ちがいいものだとは思いませんでした。伴走者の上園真吾さんと心をひとつにしてスタートラインに立ち、ピストルの号砲と同時にスターティングブロックを勢いよく蹴り出します。レーンに飛び出してからはただただ無心。上園さんと繋がった紐を通してリズムを感じて、風を感じて、息づかいを感じて、見えないゴールラインを目指します。

僕が生まれたとき、体重はわずか1000グラムでした。27週の早産による未熟児網膜症で、1歳で右目が見えなくなり、5歳で左目も視力を失いました。それでも父と母から「生まれてきてくれただけでよかった」という想いが込められた「佳生」という名前をもらい、愛情たっぷりにここまで育ててもらいました。二つ年上の兄もよく面倒を見てくれ、親の心配をよそにやんちゃで活発な幼少時代を過ごした記憶があります。盲学校に入学してからは、平日は寄宿舎で過ごし、週末は実家に帰る日々。時には不安と寂しさで落ち込むこともありましたが、陸上競技と出会ってから人生が変わり始めました。

14歳の時に出場した第10回全国障害者スポーツ大会をきっかけに本格的に陸上を始め、今では理学療法士やテクニカルコーチ、伴走の上園さんらがプロジェクトチームを結成して日々の練習をサポートしてくれています。皆様の支えや協力があってこそ、僕は走り続けることができます。

2013年10月に行われたマレーシアでの大会(アジアユースパラ競技大会陸上全盲の部)では、100mと200mで金メダルを取ることができました。レースの前に、伴走者の上園さんから「記録を狙わず、勝負に勝とう」とアドバイスがありました。明確でポジティブな目標を設定することで気持ちがクリアになり、結果として自己新記録(100mは12秒66、200mで26秒25)を出すことができました。手にした金メダルはずっしりと重く、これまで関わってくださった方への感謝の気持ちでいっぱいです。母と兄もマレーシアまで応援に駆けつけてくれたのですが、表彰式のあとに母と兄の首にメダルを掛けて「ありがとう」と感謝の言葉を伝えることができました。

今後の目標はパラリンピックでメダルを取ること。そしていつか、僕と同じように目が見えない子どもたちに走ることの喜びを伝えることです。目が見えない苦しさや悔しさから「どうせ何もできない」というのが口癖だった僕ですが、初めてグラウンドを全力疾走したときの爽快感は今も忘れられません。目が見えなくなって、見えたもの。それは心の温かさです。これからも感謝の気持ちを忘れずにしっかりと前を向いて走っていきたいと思います。

左からお母さんの公仁子さん、佳生くん、伴走者の上園真吾さん

スタートダッシュで勢いよくレーンに飛び出す佳生くん